



帝京大学小学校だより

活躍の場

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

私が板橋区の小学校で学級担任をしていた頃、区の施策として小児喘息の症状がある小中学生を千葉県の大井海岸に連れて行き、海水浴や多様な活動を通して健康の保持増進を図る「転地療養」という取組がありました。夏休み中に6泊7日の行程で、小学校3年生から中学校3年生（受験勉強の関係で中学校3年生は少数でした）までの希望者が参加していました。スタッフは小・中学校の教員、大学病院の医師と看護師、区の職員で、子どもたちは男女別に色々な学年が入り混じるように班編制がされていました。私は、6年間ほどスタッフとして参加しました。

中学生の多くは、小学生の頃からこの転地療養に参加していて、班の最年長になるとリーダーを任せられます。私が初めてスタッフとして参加したときの担当班では、中学校2年生の男子生徒Aさんがリーダーでした。事前の打合せや実施要項から、大まかなタイムスケジュールやイベントは把握していましたが、細かい動きや効率的な導線など経験してみないと分かりにくいことが多々ありました。そんな私を積極的にサポートしてくれたのがAさんです。

「石井先生、行きに昼食を食べる時は、お店の裏の大きな木の下が涼しくて最高です。でも、多くの班がねらっている場所です。先生はできるだけ早くお弁当を人数分もらってきてください。ぼくは、班の人を引き連れて木の下でレジャーシートを敷かせて待っていますから。」など、的確なアドバイスをしてくれました。また、宿舎の部屋に入ると班のメンバーを集めて、「夜、喘息の発作を起こしやすい人は手を挙げてください。その人はできるだけドアに近い場所に布団を敷いてもらいます。僕は一番奥の場所に寝ます。先生が夜のミーティングでいないときなど、困ったことがあったらぼくが寝ていても気にしないで起こしていいですよ。」と、さながら担任のような指示も出していました。私が「Aさん、素晴らしいよ。こんなに心配りができて、計画的に人を動かせる人材は学校の教師でも少ないよ。まして中学生では…」と感心しながらお礼を言うと、Aさんは少しはにかみながら、「ぼく、この転地に来るのが、1年間の中でも最高の楽しみなんです。」と答えました。私は、彼が普段の学校生活でもリーダーシップを発揮してバリバリ活躍しているのだろうと考えていました。

転地療養も無事に終わり、その年の12月にたまたまAさんの中学校の担任の先生と話をする機会がありました。転地での彼の活躍ぶりについて話をすると、担任の先生はひどく驚いていました。クラスでは大人しく、どちらかというと前に出るタイプではないとのことでした。喘息のために欠席も多く、体力もあるほうではないなど、転地のイメージとはかけ離れた学校生活を送っていました。

永年区の転地療養事業に携わっている職員さんにこの件について話をすると、普段の学校では経験できない役割を転地で経験できることを楽しみにしている子どもが多いこと、複数回参加している子どもの中には喘息の発作が起きて亡くなる子どもがいること、転地のメンバー同士では普段の学校では話せない悩みや苦しみが共有できることなど、私の気付かなかった転地療養事業のもつ深い部分を知りました。Aさんの「この転地に来るのが、1年間の中でも最高の楽しみなんです。」という言葉に深く噛みしめ直しました。そして、普段やりたくてもできなかったポジションが、あんなにもAさんを輝かせていたことを再認識しました。

子どもたち一人一人には得手不得手が当然あります。学校では得意なことは任せ、苦手なことは教師が支援しながら挑戦させてみるのが重要だと考えています。もちろん失敗はOKです。その失敗を教師も子どもたちも応援し、少しずつ前に進めることに価値があります。

